
逃亡。

風唄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
逃亡。

【Nコード】
N7930A

【作者名】
風唄

【あらすじ】
自分は、いや、俺は逃げた、敵から、味方から、戦友から…全てから… 逃げた。

（前書き）

太平洋戦争末期の日本軍が舞台です。私の二作目になります、未熟ではありますが読んでいただけると幸いです m（――） m

はあ、はあ、はあ…

自分は…いや、俺は…逃げた、

敵から、味方から、仲間から…全てから…逃げた、

今頃、前線は壊滅していることだろう、

戦力差は明らかだった、

後方の司令部は武運長久を祈る、と、だけ言った、

つまり、援軍は送らない、現地死守せよ、と言う意味だ、

「武運長久を祈る」

とは玉碎せよ、と言う噂もあった、

指揮官は命令にしたがった、

それが軍人というものだ、

戦友は戦いに行っただろう、

仲間は皆、死ぬだろうか、

だが、俺は逃げた、

必死で逃げた、

後ろでは夜闇の中、銃声が始まった、

敵軍の戦車らしき散発的な発砲音、重機関銃の断続的な銃声、自動小銃の銃声、我が軍……いや、日本軍の小銃の銃声、

本来なら、俺……いや、自分もその場に居たことだろう、

だが、俺はここに居る、

長く伸びた草を掻き分け、

小さな川を泳ぎ、

山を越え、

ひたすら逃げた、

俺はどこに向かっているかもわからず、

逃げた、

いつの間にか銃声は聞こえなくなっていた、

日本軍は玉砕したのだろうか、

それとも、降伏したのだろうか、

それを確認する術は無い、

やがて、夜が明けた、

俺はまだ逃げる、

ひたすら逃げる、

やがて後方…つまり、昨夜戦いがあつた方から飛行機の爆音が聞こえてきた、

明らかに敵軍の戦闘機だ、

これで、一つの希望は断たれた、

同時に一つの恐怖も断たれた、

ここで俺は休むことにした、

これからの行動を考えながら、

俺は近くの木に腰掛けると疲れがたまっていたのだろう、すぐに睡眠に誘われ堕ちていった、

目覚めるともう夕方だった、

俺の脳は急速に活動を始めた、

まず、これからの行動を考えるより先に、所持品を確認することにした、

急いで逃げてきたから何を持っているかわからない、

とりあえず所持品は…僅かばかりの米、飯合、小銃と僅かな小銃弾、それに…自決用の手榴弾が一つ、使えるものはこのくらいだろうか、

とりあえずしばらくは大丈夫だろうか、

次にどこに行くかを考えた、

…おそらく部隊は玉砕しただろう、

あの指揮官が、絶対に降伏する筈が無い、

それならば、後方の司令部に向かおう、

部隊からの伝令と言えば保護くらいしてくれるだろう、

俺はそう考えると、司令部に向かうように決めた、

司令部は歩いて一日で着くだろう、

そう考え、俺は早速歩き出した、早くしないと敵軍が追撃するかもしれない、

司令部が転進と言う名の撤退を既に開始しているかもしれない、

俺はそう考えると、自然と足が速くなった、

…俺は、逃げている、

また、逃げている、

そして、日が暮れた、

また、夜が空けた、

そこには、なにか、気の抜けたような空気が…司令部に、流れていた、

俺、いや、自分は近くに居た兵に聞いた、

何故、敵が迫っているのにこんな状況なのかと、

兵は逆に聞いた、誰だ、と、

自分は答えた、前線部隊からの伝令だと、

兵は答えた、とりあえず司令部に向かえと、

自分は司令部に向かった、

そして、参謀と思われる将校に話した、

前線部隊からの伝令だと、

将校は聞いた、部隊はどうなったかと、

自分は答えた、最後まで居なかったのだからないと、

そして、自分は言った司令官に直接言いたいことがあると、

俺は司令官に会えば口車で何とかできる自信があった、

将校は答えた、司令官は死んだと、

俺は驚きつつ聞いた、何故と、

将校は答えた、皇国は無条件降伏したと、

それからの事はよく覚えてない、

ただ、部隊の無駄死にが、逃亡したことが、ずっしりと重く感じた、

やがて、敵軍が司令部にきた、

ここで、我々は武装解除され、日本に向かうことになった、

我々はほかの部隊より早くに日本に帰れたらしい、

俺は、何とか部隊と一緒に帰ることができた、

すぐに、郷里に帰ることができた、

そして、非日常が終わり、日常が始まった、

それは、とても味気ない、生活だった、

何をしていても、

あの、逃げたことが、

気になり、

良心の呵責に耐えられなかった、

何度も自殺しようと思った、

だが、できなかった、

ずっと悩んでいた、

何故、あの時、皆と一緒に戦わなかったのかと、

ずっと悩んでいた、

夢も見た、

一睡も出来ない日もざらだった、

何年も何年も、

やがて、俺は年をとった、

何年も時がたった、

まだ、夢にはうなされている、

何度も何度も後悔した、

そして、ある日、ある人が現れた、

それは、死んだと思っていた戦友だった、

戦友は語った、あの時の事を、

戦友は俺が逃げたことを知らないようだった、

あの時、指揮官が真っ先に死んだこと、のち、降伏した事を、

戦友は、俺が死んだと思っていたらしい、

無理も無い、俺は逃げたのだから、

そうして、戦友は帰っていった、

また来るよ、と一言残して、

俺は、遂に言えなかった、

また、後悔の日々が始まった、

なぜ、あの時言えなかったのだろう、

そんな俺のただ一つの希望は、戦友のまた来るよと言つ言葉だった、

俺は、その時を想定して何度も何度も、練習した、

子供みたいに、

だが、いくら待っても、戦友は来なかった、

俺は探した、戦友を、

だが、戦友は一向に見つからなかった、

何年たっても見つからなかった、

そして、遂に見つけた、

戦友は還らぬ人になっていた、

事故だったそうだが、

俺は泣いた、

死ぬ程泣いた、

何日も泣いた、

それは、戦友が死んだためでは無かった、

自分の罪の意識であつた、

そして、自分に嫌悪した、

何日も泣いた、

墓の前で泣いた、

そして、ある、雨の日、俺はぼつりぼつりと語り出した、

あの、逃げたことを、

戦友を見殺しにしたことを、

語り終えたら、雨が上がっていた、

それは、彼が許してくれている証拠のような気がした、

彼は、全てを知っていたように思えた、

そして、俺…自分…いや、私は…天に昇った。

遺体が発見されたのは、その翌日、

そこには、墓の前で息絶えている死体があった、

衰弱死だった、

ただ、その顔は、微笑んでいたように、見えたと言う。

（後書き）

読んでいただきありがとうございましたm（――）m未熟な作品ですが、評価、感想をいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7930a/>

逃亡。

2010年11月20日15時21分発行